

伊野川から忠別川までの地名②

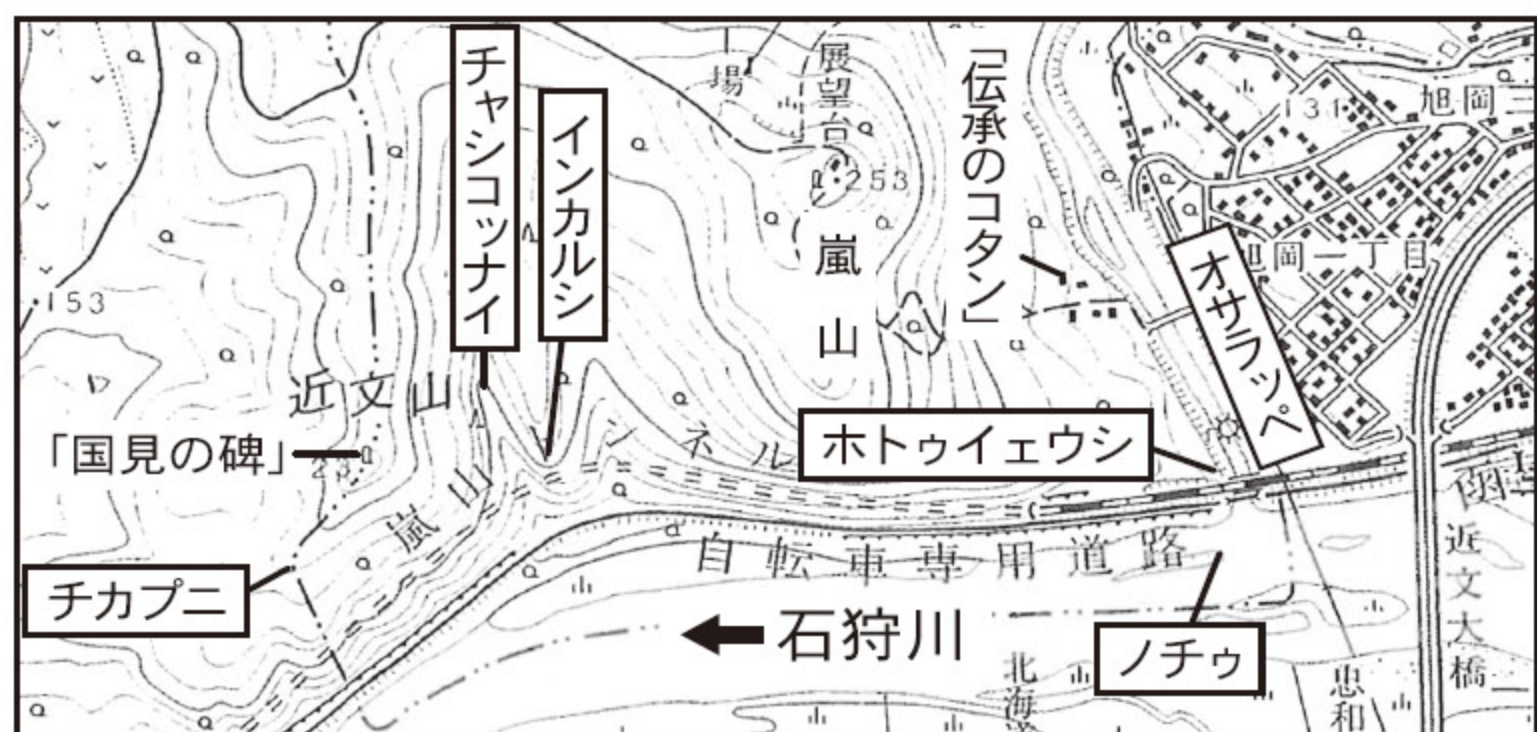
ノチウとオサラッペ川(中)

前回、昭和六十三年七月に、四人乗りゴムボートで石狩川を下った時に、「ノチウ(nociw 星)」の巨巖に高校生が三人登った写真を紹介した。その「ノチウ(nociw 星)」の巨巖の写真が、写真①の松浦武四郎が安政四年(一八五七年)に野帳(のちよう)「フィールドノート」に描いた「ノチウ」の絵に非常に似ていることに驚いたのである。さて、「旭川のアイヌ語地名」の中で、最も問題になっているのがオサラッペ川である。そこで、明治二十四年の永田方正と、昭和三十五年の知里真志保の地名解で、まず、それぞれの解釈を見てみよう。

【永田方正】o-saratpe オサラッペー女神玉門ヲ出シタル処。「サ

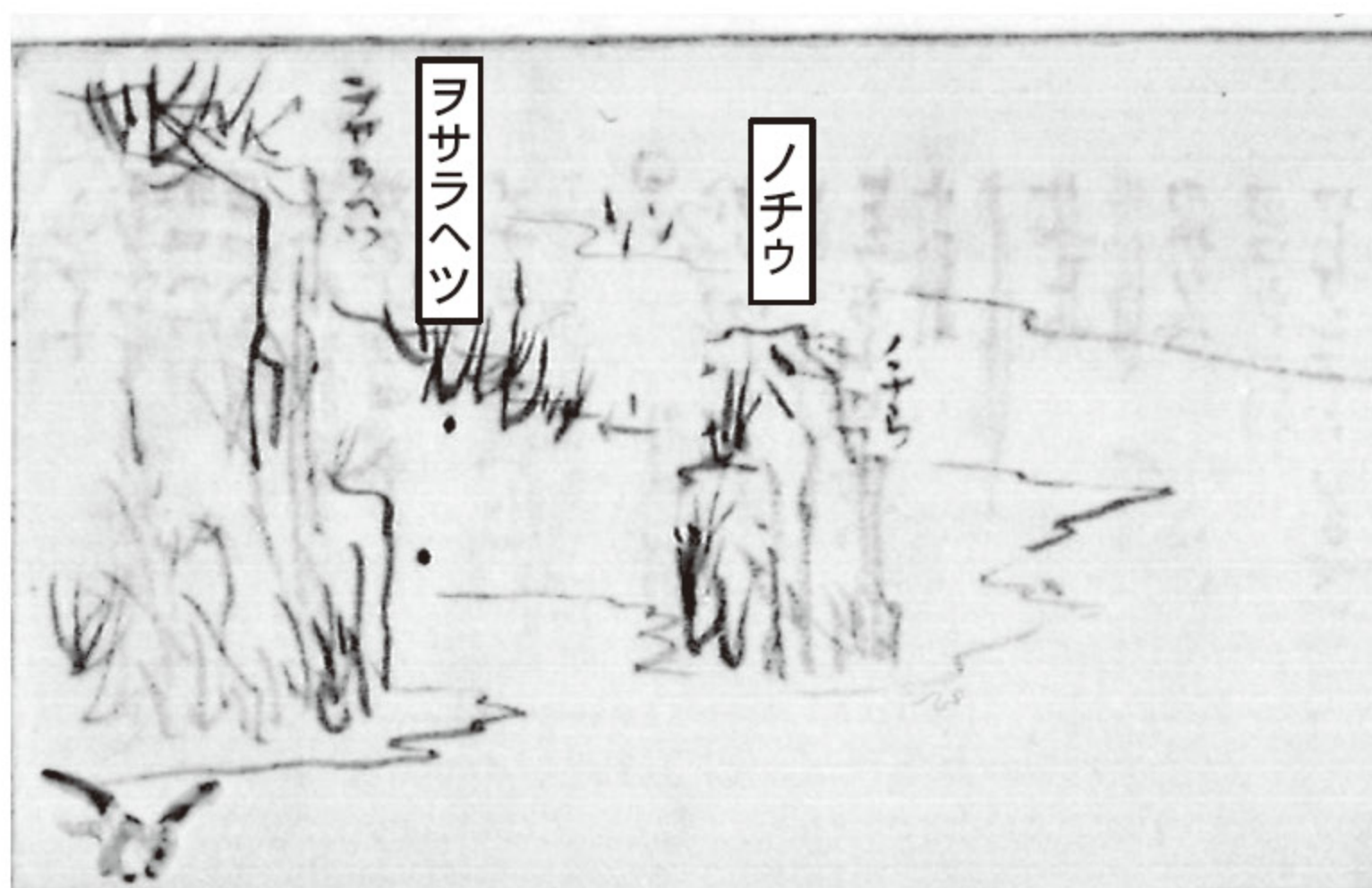
ラ」ハ出スノ義。此ノ処茅ナシ。

永田方正は、オサラッペ川の川口(川尻)には、「サラ(sara)葦原(註「永田は茅と表記」がないことを明記し、かつ、「サラ(sara)は、「出す」の意味であると注記している。すなわち、「オサラッペ(o-saratpe)は、普通は、川口に茅(葦)ある所と訳されるが、この川口には、茅(葦)がなく、サラ(sara)は、出すの意味である」と、わざわざ断り書きをしているのである。そして、当時の伝承である「女神玉門を出したる処」が、オサラッペ川の由来であると記録したのである。



他方、知里真志保は、永田地名解に敢然と反論する。すなわち、

【知里真志保】おさらッペ川ー原名オサルペッ(o-saratpet 陰所を・出している・川)と



写真①

呼んだのかも知れないと語った。……と、追記した。

安政四年(一八五七年)に、写真①のノチウとオサラッペのスケッチを描いた松浦武四郎は、野帳に、文化三年(一八〇六年)生まれのシイピラサから、オサラッペ川の地名解を次のように記録した(写真②)。

ヲサラベツ 左 物を分ける事を云。差開けし故云り。

写真②

松浦武四郎は、この野帳から、出張復命書に当たる報文日誌の「再篇石狩日誌」に、写真①のスケッチを清書した上で、次のように記述している。

サルブツー川口中凡十五間(註「約二十七間」、前に一ツの岩有、其風景よろし。本名ヲサラベツと云よし。

訳して物の終わりと云事のよし。

松浦武四郎の記録では、オサラッペ川は、サルブツの別称もあり、本名はヲサラベツで、その地名解は、「物の終わり」という意味であるという。先のシイピラサの地名解とも異なっている。呼称履歴を含めて、次回にまとめたい。

断章 旭川のアイヌ語地名研究

133

高橋 基